慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	作家と筆耕 : 浅井了意を中心に
Sub Title	Author and writer
Author	石川, 透(Ishikawa, Tōru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.113, No.1 (2017. 12) ,p.192- 202
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	田坂憲二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01130001-0192

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

作家と筆耕

――浅井了意を中心に――

石川　透

一、はじめに

これまで、拙著『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店、二〇〇三年八月）、『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店、二〇〇九年五月）等において、仮名草子最大の作家浅井了意が、多くの仮名草子作品を制作すると同時に、多くの奈良絵本・絵巻の詞書部分の筆耕を担当していたことを記してきた。二〇〇〇年頃に初めてこのことに気付いて以来、浅井了意が詞書を記した奈良絵本・絵巻の実数は着実に増えてきている。

浅井了意が制作した作品、と記すとまぎらわしいこともあるので、少し整理して記すと、浅井了意は、基本的には多くの仮名草子の内容を創作した人物である。しかし、それとは別に、誰が内容を創作したということとは関係なく、浅井了意は、奈良絵本・絵巻の詞書部分の執筆を行っていたのである。このような本の清書をする者のことを筆耕（筆工）と呼ぶが、浅井了意はこの筆耕としての活動も相当数行っていたのである。

とうぜん、筆耕は字を書くのが上手な者がする仕事であって、内容を創作する作家とは、区別するべき職人の仕事であると言えよう。ただし、浅井了意が活動した十七世紀後半に、内容を作る作家という仕事と、すでに出来上がっている作品の清書だけを行う筆耕という仕事が、きちんと区別されていたかどうかは不明である。今日では、全く違う仕事としてとらえられるであろうが、そう簡単な問題ではない。

よく、作家という活動のみで生活できたのは曲亭馬琴からであると言われるが、これが本当だとすれば、作家は、江戸時代後期になってやっと生活上自立できたことになる。それより百五十年も前の江戸時代前期のことは、ほとんどわかっていないし、作家の仕事だけで生活していた者は存在しなかった、と考えられる。とすれば、江戸時代後期、すなわち、十八世紀より前の作家たちは、どのように生活していたのであろうか。

二、物語と作者

作家はいつから作品のみの報酬で生活できたのか、ということは大きな問題の一つである。具体的に、この時代にこれくらい書くといくらの報酬がもらえるか、断片的な資料は存在しようが、その歴史をたどれるほどの資料が残されているとは考えにくい。前述の曲亭馬琴の話はそう間違いではないであろうが、それ以前の作家が作家としての報酬をどのくらい得ていたのかは、たいへん興味深い。おそらく、今後は作家の報酬についての資料も出されるであろうが、さすがに、江戸時代前期の作家となると、良い資料は期待できないであろう。

そもそも、作家という存在が確立したのはいつであろうか。江戸時代より前、和歌を作る歌人ならばともかく、物語、今日言うところの小説を記すにあたって、そこに署名する者はいなかったはずである。紫式部だけは、物語作家として知られているが、紫式部すら、『源氏物語』に署名はしていない。さまざまな記述から、紫式部が作者であることが判明しているだけで、決して署名はしていないのである。顕示欲が強かったと思われる紫式部が署名していないくらいであるから、それ以外の物語作者が、署名していたとは考えにくい。物語には署名しない、という暗黙のルールがあったと思われるのである。

そのルールは、平安時代から鎌倉時代、さらには室町時代まで続き、当時の物語作品である、鎌倉時代物語（中世王朝物語）や室町時代物語（御伽草子）には、五百編近い作品の存在が確認されているが、基本的には、作者が署名した作品はないのである。もちろん、ただの書写者の名前が残されている写本はあるし、さまざまな作者名の推測がなされている作品はあるが、確定できるものはないのが現状である。

ところが、江戸時代になって制作された物語・小説を含む仮名草子には、作者名が明らかにされている作品が登場する。もちろん、作者の署名のある作品となるとほとんど存在しないが、出版の時代になったこともあり、作者を確定できる作品が増えるのである。浅井了意は仮名草子の時代でもその後半に活躍したこともあり、多くの作品が浅井了意の創作であると推定されている。

この仮名草子にいたる時代までの物語・小説に、なぜ作者が署名しなかったのかは、さまざまな推測ができるが、基本的には、物語・小説が、和歌のような文学とは異なるものという意識があり、さらには、物語・小説の作家であると判明すると問題があったのであろう。そのような環境の中で、物語・小説には署名しない、という伝統が生まれたのであろうと考えられる。

そのような、作家という名前が表に出ない時代には、どのような現象が生まれるのであろうか。もともと作者が明らかでない物語作品を書写する時には、写す方もいいかげんになるものである。現在残されている、鎌倉時代や室町時代の物語作品群を見ていくと、伝本が多く残されている作品には、相当に本文の異なる異本が多く存在しているのである。以前、このような現象を取り上げて、「物語の成長」という論を講演し、『魅力の御伽草子』（三弥井書店、二〇〇〇年三月）に収めたが、その考えは今も変わっていない。

江戸時代より前は写本の時代であることもあって、元になった作品を書写する時に、へいきで内容を変えてしまうのである。江戸時代になって出版が多く行われるようになると、同じものが大量生産されるので、内容を変えてしまうことは行われなくなったが、それまでは、物語の作者も存在しない、ある程度はその内容を変えられる時代であったのである。

三、浅井了意と自筆版下

この伝統は、江戸時代になっても最初のうちは色濃く残っていたはずで、仮名草子作家もほとんど署名することはなかった。そして、物語と類似の作品群も大量に作られる時代となり、仮名草子の作品群には、物語・小説とは言えないような作品群も多く登場してきたのである。

浅井了意は、そのような仮名草子作家の中で、さまざまな作品を多く残した作者として知られている。浅井了意作品の研究書は枚挙にいとまのないほど出版されているので、それらを見ていただくことにして、ここでは、浅井了意の筆耕としての問題に絞って述べてみたい。

浅井了意の創作とされる作品には、署名を伴う作品は少なく、あったとしてもその序文に作品の成立事情が記されているに過ぎない。であるから、多くの作品は推定となるが、北条秀雄氏『改訂増補　浅井了意』（笠間書院、一九七二年三月）による推定は、そう大きくは齟齬していないであろう。その後も、特に浅井了意の自筆版下を伴う作品が、浅井了意の創作であろうとの、多くの研究者の指摘も間違いないところであろう。

自筆版下とは、作家が創作した自らの作品の版下を書写したもののことである。近世文学研究においては常識的なことであるが、内容を作った作家が、自ら出版時の版下を記すことは多くはない。これは単純な話で、内容を創作した作家が、字がうまいとは限らないからである。現代においても、作家の字は上手ではないことの方が多く、校正で苦労する、という報告はさまざまになされている。もちろん、もともと上手な字を書く人でも、売れっ子の作家になればなるほど、早く大量に書く必要が出てきて、へたな字になってしまうものである。

江戸時代の版本の制作方法からすると、作家に字を書いてもらうよりは、清書のできる字のプロに書いてもらった方がよかったのである。そうした事情の中で、創作した本人が清書した作品、すなわち、作家と筆耕が同一人である作品が存在していたのであり、その代表が浅井了意だったのである。ただし、不思議なことに、浅井了意創作とされている作品には、自

筆版下だけではなく、他の筆耕に清書させた作品も存在しているのである。

それはともかく、ここで問題なのは、浅井了意創作とされる作品の内、自筆版下とされる作品群であるので、これまでの研究を踏まえた上で、浅井了意自筆版下作品を列挙をすると、以下のようになる。

版本（自筆版下）

『難波物語』　一巻　明暦元年刊
『三綱行実図（平仮名本）』　九冊
『因果物語（平仮名本）』　六巻
『やうきひ物語』　三巻
『可笑記評判』　十巻　万治三年刊
『浮世物語』　五巻
『かなめ石』　三巻
『東海道名所記』　六巻（巻四～六）
『江戸名所記』　七巻　寛文二年刊
『京雀』　七巻　寛文五年刊
『新撰御ひいながた』　一巻　寛文六年刊（序文のみ）
『密厳上人行状記』　三巻　寛文一二年刊（序文のみ）
『鬼理至端破却論伝』　三巻
『勧進念仏集』　一巻　貞享五年跋
『父母恩重経和談抄』　六冊　元禄二年刊（序文のみ）

『狗張子』　七巻　元禄五年刊（巻一～六）

これらのうち、『難波物語』と『密厳上人行状記』については、私に同筆のものとして補った作品であり、その内容からも浅井了意創作である可能性の高い作品である。また、それぞれの作品のどこの部分が自筆版下なのかは、研究者により見解の異なるところがあるが、現在の私の判断は、それぞれの（　）括弧内に記した通りである。

これを見ただけでも、浅井了意の自筆版下とされる作品でも、部分的に他の筆耕に任せた部分の存在することがわかる。この事情を解明することはなかなか困難であるが、単純に忙しくて部分的に清書できなかった、という程度の問題であるのか、今後も検討を続けたいと思う。

四、作家と筆耕

浅井了意作品には、自筆版下が存在した、ということは何を意味するのであろうか。少なくとも、字が上手な人間であるということはわかるが、先に記した、作家と筆耕の違いの意識がどれほどあったのか、少し疑問になってくる。もちろん、作家としての仕事であるならば、江戸時代前期でも下書をしていたと思われる。一方で、清書の仕事であるならば、読者に読みやすいように、等間隔に丁寧に書くであろうから、実際に書かれたものの差は歴然としていたはずである。

では、内容については、作者という意識があったのかどうか。十七世紀後半になったとはいえ、まだまだ意識していないような印象がある。だいたい、浅井了意の作品には、同類の短編の話を集めた説話集的なものが多く、それらとは別に漢籍の翻訳作品も存在する。浅井了意による仮名草子作品は、かつては二人の浅井了意がいたとする論があったほどに、創作したとされる作品は数多い。しかし、よく見ると、もともとどこかにあった話を利用したものが多く、悪くいえば現代の大学生のコピペのような作品が多く存在しているのである。自分としての作品を創作するといった感じではない。したがって、大量に作品を創作したとしてもおかしくはないのである。

これは、浅井了意の作品を批判しているのではなく、当時の流行でもあったと思われる。そして、このような作品を作らせたのは、了意が筆耕という仕事をしていたからではないか、ということを考えるのである。今日では全く別の存在である、作家と筆耕という立場が、了意においては、混然としているのである。また、以下に記すように、浅井了意が、奈良絵本・絵巻の筆耕も勤めていた、と判明したときには、最初筆耕の仕事をし、その後にレベルの高い作家になった、と考えていたのであるが、両方を同時に行っていたのではないか、とも考えるようになってきたのである。

五、奈良絵本・絵巻の筆耕

浅井了意の自筆版下については、江戸時代の膨大な版本の世界において、もちろん、全ての版本を見たわけではないが、これまで、浅井了意が創作したと思われる作品以外のものに、その筆跡が現れることはない。おそらく、版本については、他人の創作物の筆耕になることはなかったのである。ところが、奈良絵本・絵巻の類については、最初に報告した頃から、毎年のように新しい浅井了意筆と考えられる作品が出現している。

ここで、あらためて浅井了意が奈良絵本・絵巻類の詞書を記した作品を列挙すると、以下のようになる。

自筆資料

石川透蔵『源平盛衰記』四九帖「明暦元」「洛下野父羊岐斎幸庵処士」

所在不明『太平記』四二帖

広島大学国文学研究室蔵『古今和歌集』二帖

聖徳寺蔵『赤栴檀弥陀の尊形一躯造立の縁起』一軸「寛文九，洛下本性寺照儀坊釈了意」

聖徳寺蔵『七宝縁起』一軸

聖徳寺蔵『濃州大浦邑聖徳寺系譜』一軸（真名文）

聖徳寺蔵『小笠原家系図』一軸（部分）（真名文）
叡山文庫蔵『天台三大部奉納願書』二丁（真名文）
四天王寺蔵『太上感応編』一冊（真名文）「延宝二」「本性寺昭儀坊沙門釈了意」

大型絵巻物

大阪大谷大学図書館蔵『俵藤太』三軸
和洋女子大学図書館蔵『田村』三軸
海の見える杜美術館蔵『義経都話』二軸
思文閣古書資料目録第一六四号『八まんの本地』残欠一軸
思文閣古書資料目録第一四〇号『十番切』二軸
町田市立博物館蔵『たはらかさね耕作』二軸
古代出雲歴史博物館『大黒舞』二軸
國學院大學図書館蔵『武家繁昌』二軸
石川透蔵『蓬莱山』二軸
石川透蔵『酒呑童子』残欠一軸
石川透蔵『若みどり』一軸（挿絵欠）
石川透蔵『子易物語』一軸（下のみ）
上野学園日本音楽資料室『琵琶の由来』一軸

特大縦型奈良絵本

佐々木信綱旧蔵『七夕』一冊（上のみ）

半紙縦型奈良絵本

神奈川県立歴史博物館蔵『平家物語』二四帖（六帖のみ）
特大横型奈良絵本
チェスタービーテイ図書館蔵『義経地獄破り』二冊

これらのうち、最初の自筆資料は、浅井了意の筆跡を確定する上できわめて重要な資料群であり、これらと同筆の奈良絵本・絵巻がそれ以下となる。これらのうち、この数年で大きく増えてきたのが大型絵巻物である。これは、室町時代以降になると中型や小型の絵巻物も存在するので、大型絵巻物と呼称したが、基本的な縦三十糎強の大きさの絵巻のことである。

これらの奈良絵本・絵巻を見ると、『平家物語』や『酒呑童子』のような有名な古くからの作品も存在するが、ほとんど知られていない、場合によっては天下の孤本とされている作品も存在しているのである。自筆資料に出ている、『源平盛衰記』『太平記』を含めて考えると、もともと存在した作品を書写した、筆耕としての仕事をしていたことは確実であるが、そうではない、無名の作品群の存在は何を意味するのであろうか。

六、作家と筆耕の報酬

これまでもこの問題については論じたことがあるが、浅井了意は比較的に若い頃は筆耕の仕事をしていたとはいえ、今日いう作家にも早い段階でなっていると考えられる。版本の場合には、内容を創作し、やがては自筆版下を作った作品が全平仮名作品の内の半分ほどを占めている。

一方で、内容を創作した後に、版本ではなく、奈良絵本・絵巻として清書した作品が存在するのではないか、とも思えるのである。仕事の量からすると、版下と豪華な写本である奈良絵本・絵巻とでは、だいぶ異なる印象もあるが、少なくとも、了意はその両方を特異としている。となると、自分で創作した作品を、奈良絵本・絵巻に清書しても何らおかしくないのである。

聖徳寺蔵『赤栴檀弥陀の尊形一躯造立の縁起』は、寛文九年の署名のある作品であるが、これは、了意自らが創作したと思われる作品である。もちろん、他の彼の作品と同様に、どこかの記述を利用している可能性はあるが、これも一種の創作物であろう。この巻物は、現在名古屋市にある聖徳寺のためだけに記したものであるが、大名家が購入する奈良絵本・絵巻を絵草紙屋の依頼によって、新たな作品を創作し、自ら奈良絵本・絵巻の詞書として制作していても、何らおかしくはないのである。

この作業は、出版書肆の依頼を受けて作品を創作し、自筆版下を制作したことと全く同じであり、仕事量においては大差はないのである。そのような目で、上記の伝本の少ない奈良絵本・絵巻を見ると、いかにも浅井了意が好みそうな題材が多く存在しているのである。ただし、まだこれは仮説であって、どの奈良絵本・絵巻の内容が浅井了意の創作であるとは、言える段階ではないが、そのような可能性は十分にあると思う。となると、御伽草子に分類されている作品群に浅井了意が創作した作品が存在することになり、御伽草子と仮名草子にとっては、大きな問題に発展してしまうのである。

そのような問題があることは別にして、はたして、浅井了意が筆耕として働いたときの報酬はいかほどだったのであろうか。奈良絵本・絵巻には、了意以外の筆耕の作品で同一筆跡の作品群も存在する。また、版本にも数多くの筆跡があり、それらも同一筆者という視点から分類でき、その筆耕の数は、奈良絵本・絵巻の筆耕の数よりはるかに多い。それらはみな、筆耕として働いた人物のものである。その量からすると、たまたま書いたというレベルではない。明らかに仕事として書いているのである。とうぜんのことながら、それらの筆耕は、その仕事によって、収入を得ていたはずである。おそらくは、筆耕職人として生活していたはずである。

浅井了意も、奈良絵本・絵巻類については、筆耕として働いていたと考えられる。ところが、いつからと判明するわけではないが、その内容を創作する作家にもなっている。そして、その創作した内容を、自筆版下として制作しているのである。内容を制作するにあたっても、おそらくは、報酬を得ているはずである。その報酬は、筆耕としての収入とどれくらい違うのか、ということも興味あるが、具体的な数字はわからない。

しかしながら、当時の出版書肆や絵草紙屋からすれば、新しい内容の作品も創作してくれて、その清書も行ってくれたら、これほど良いことはない。筆耕にしばしば起こる誤写も、少なくなるはずである。一方、作家兼筆耕の側も、どの程度かはわからないが、少なくとも、そのどちらかだけの仕事よりは、収入は増えるはずである。

浅井了意は、十七世紀の後半に、まだまだ作家だけの報酬では生活できない時代に、もともと行なっていた筆耕も続けることによって、生活していたのではないか、そのようなことを考えるべきではないか、と思っている。

七、おわりに

いずれにしても、作家と筆耕という問題を考える場合に、浅井了意の資料群は、かっこうの研究材料となるであろう。浅井了意が詞書を記した奈良絵本・絵巻もまだまだ出てくると思う。既に指摘した作品群を含めて、それらの意味するところを考えるのは、今後の課題である。